

オプス・テイ属人区司祭 酒井俊弘

「安い、早い、旨い！」三拍子そろった食事と言えば、吉野家の牛丼。では、この三拍子がそろったスポーツとは？走るのが趣味の私にとっては、ジョギングがそうです。「掛かるお金が安い！体脂肪が減るのが早い！走った後のビールが旨い！」の三拍子。レースに出場する醍醐味の一つは、後半に足がもつれつつある先行者たちをゴボウ抜きすること。前半は無理をせず、後半スパートするというのが定石です。ただ、いつもうまくいくわけではありません。昨年出た某ハーフマラソン大会では、逆に後半ゴボウ抜け するみじめな結果となりました。今年は雪辱を期しています！

さて、最近、「168位からのゴボウ抜き」という話題がありました。テノール歌手の秋川雅史さんが歌った「千の風になって」のCDが100万枚を超えたという記事によると、オリコン初登場168位でその後1位になったという記録も打ち立てたそうです。この歌の歌詞、a thousand winds という作者不明の詩には、人は死んでも、その霊は、風や光や雪や鳥や星になって残っている、という自然崇拝的思想が背景にあるとされています。しかし、この歌をキリスト教的に解釈することも可能だと私は思います。

新井満さんの日本語詩の中の、「私のお墓の前で泣かないでください。そこに私はいません。眠ってなんかいません」、「私のお墓の前で泣かないでください。そこに私はいません。死んでなんかいません」という言葉は、復活の場面での天使とイエス様の言葉を思い出させます。「途方に暮れていると、輝く衣を着た二人の人がそばに現れた。婦人たちが恐れて地に顔を伏せると、二人は言った。『なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。あの方は、ここにはおられない』」（ルカ 24,4-6）。「イエスは言われた。『婦人よ、なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか』」（ヨハネ 20,15）

死に打ち勝って復活されたイエスを信じる者にとっては、「キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となられた」（1コリント 15,20）方であって、私たちが皆「蒔かれるときは朽ちるものでも、朽ちないものに復活する」（同上 15,42）のです。体の復活を待つ間、亡くなった者たちは、神と共に風になって世界を駆け巡っているとも言えるでしょう。詩編の104は言います。「わたしの神よ、あなたは大きいなる方。（...）雲を御自分のための車とし、風の翼に乗って行き巡り、さまざまな風を伝令とする」

風の中に、秋の光、冬の雪、朝の鳥、夜の星の中に神様を見ることができれば、生きているものも、亡くなった方々も、共にその神と生きていることが実感できます。「主は、わたしたちのために死なれましたが、それは、わたしたちが、目覚めていても眠っていても、主と共に生きるようになるためです。」（1テサロニケ 5,10）

私たちの信仰を込めてこのヒットソングを口にしながら、愛しい人たちと再会するというゴールを目指して、歩んで（走って？）行きましょう。